

東北大学大学院歯学研究科 インターフェイス口腔健康科学 第1回学術フォーラム

Forum for Interface Oral Health Science

血栓症・歯周病治療の新しいパラダイムを求めて
松下 健二 博士
(鹿児島大学歯学部、Johns Hopkins大学医学部)

平成16年5月13日(木) 17:00-18:30
歯学部A1セミナー室(歯学部基礎研究棟1階)

血栓の形成には、血管を閉塞することによって出血を止めるという働きがある。止血は生命が存続するために必須の機能であり、血栓形成は重要な生体防御反応の一つと言える。一方、血栓の形成は血液循環を阻害することによって、心筋梗塞、脳梗塞などの血栓症や血栓性疾患を発症させる。血栓性疾患は、成人病あるいは生活習慣病のひとつであり、ガンと並んで現代の死因の主要なものである。従って、その予防と治療がガン克服とともに強く求められている。一方、歯周病も成人病や生活習慣病の側面をもち、最終的には歯牙の脱落に至り、QOLを損ねるため、その治療・予防法の確立は21世紀には必須である。歯周病の病因論については、すでに確立されているかのように考えられているが、「全身の一部としての口腔」、あるいは「成人病・生活習慣病」といった観点からの考察がまだまだ不足しているように思われる。

血栓症、歯周病ともに、その病態形成には血液循環の障害が関与しており、その基盤には血栓形成異常あるいは血液凝固異常があると考えられる。最近我々は、血管でつくられる一酸化窒素(NO)が血管内における血栓形成を抑える仕組みを明らかにした。すなわち、NOがその分子ターゲットであるNSFの活性を制御することによって、血栓形成を抑えることを示した。さらに、NSFの活性を抑える複合ペプチドを用いて、血栓形成を制御できる可能性を示した。また、歯周病原菌である *Porphyromonas gingivalis* が産生する酵素 gingipainが血液凝固を亢進し、このことが歯周病の病因に深くかかわっていることを示すとともに、同酵素をターゲットにした新規治療薬の可能性についても検討した。

本フォーラムでは、血栓症・歯周病の病因に深くかかわる血栓形成・血液凝固異常の分子メカニズムについて解説するとともに、それらの分子をターゲットとした21世紀型の新しい治療のパラダイムを紹介する。

連絡先: 研究推進企画室長 篠田 壽 (内線 8310)
副研究科長 高橋 信博 (内線 8294)
第1回モデレーター 高田春比古 (内線 8305)